

世界の女の子に、生きていく力を。



Because I am a Girl

THE STATE OF THE WORLD'S GIRLS 2010

Digital and Urban Frontiers: Girls in a Changing Landscape

世界ガールズ白書 2010 年版 サマリー 女の子と都市化・デジタル化の波

「通りに住み始めた最初の晩は、木の下で眠りました。そしたら警察が来て、女の子だけを捕まえて行きました。安全な場所へ連れて行くために女の子だけを選んだのかも、と思いました。やつらは私たちをアルバート公園へ連れて行って、私の友だちの一人を指さしました。ヌタンカという名前の子でした。やつらは彼女を虐待して、出てきたとき、彼女は裸でした。私にも何かしようとしたんですけど、私は人を呼ぼうと悲鳴を上げ続けたから、何もできなかったんです。そしたらやつらは私たちにペッパー Sprey をかけて、シヤムバク（革の鞭）で打ちました。はっきりとは覚えていませんけど、13歳か14歳だったと思います。警察が友だちにすることは、絶対に忘れません」
プレシャス、南アフリカ、ダーバン（注1）

男性：どう、僕をちょっと喜ばせて100ユーロ手に入れるっていうのは、10分か15分しかかからないよ。いい話だと思うけど

女の子：でも私そういう女の子じゃないし、まだ15歳だから
オンラインチャットからの抜粋、セルビア（注2）

今年の「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」は、世界で最も急成長を遂げている2つの領域——都市環境とデジタル世界——における思春期の女の子の生活に焦点を当てている。どちらの領域も女の子と若い女性に新たな機会を提供するが、同時に新たな危険も呼び入れている。しかも、規制や調査がまだ行き届いていない危険だ。これは女の子が、性的に発達しつつあるが自分を危険から守る技術や知識をまだ持たない思春期には特に深刻な状況と言える。この時期はまさに、人生で一番助けを必要とする時期なのだ。だが、

この時期は同時に、女の子を男の子よりも劣り、重要でないものとして扱う偏見と差別のせいで、女の子が危険にさらされる時期でもある。プレシヤスのような若い女性は、多くの女の子にとって日常茶飯事となってしまう虐待に耐えなければならない理由などない。都市環境とデジタル世界という新しい領域においても、女の子には、どこにあっても常に受けるべき保護、機会、平等の権利があるはずである。

都市計画をきちんと行い、街中でもオンラインでも女の子の安全を確保すれば、そして彼女たちを危険から守りつつ、同時に彼女たちが必要な技術を身につけられるようにすれば、女の子の人生を変えるチャンスがある。今、都市が作られ、デジタル世界が拡張し続ける中、万人にとってもっと良い、もっと安全な未来を保障する技術と知識を女の子に与える機会があるのだ。

明るい光と大きな希望——都市部の思春期の女の子たち

歴史上初めて、地方よりも都市部の人口のほうが多くなっている。そしてその数は急速に増えている。開発途上国の都市部では、人口が毎月 500 万人ずつ増加しているのだ（注 3）。2030 年には、およそ 15 億人の女の子が都市部に住んでいるだろうと推測されている（注 4）。これはつまり、スラムや通りでの女の子に対する暴力も増加しているということだ。特に思春期の女の子は極度の貧困やホームレス状態から逃げ出すために物乞い、交換条件としての性行為を強いられ、その他さまざまな形の搾取や非道な行為を受ける可能性がある。一方で、都市部には女の子にチャンスを与えられる可能性がこれまでにないほどあるのも事実だ。

夢がかなう場所

女の子たちは、都会へ行けば生活が良くなると信じ、大きな夢を持って出てくる。また、統計を見ると夢見ることは間違いではないのだ。

- ・女の子は、都市部に住んでいる方が学校に通う可能性が高い。開発途上国では 10 歳から 14 歳の女の子の就学率は農村部よりも都市部のほうが 18% 高く、15 歳から 19 歳の若い女性では 37% も高い（注 5）。

- ・都市部の女の子は性と生殖の健康に関するサービスも含め、もっと良い保健サービスを受けやすい。ある調査によれば、都市部では 37% 以上の女性が HIV 予防のためにコンドームを使用すると回答したが、農村部では 17% にとどまった。さらに都市部の女の子と女性は一度でもコンドームを使ったことがあると回答した割合が 87% だったのに対し、農村部の女の子と女性では 57% だった（注 6）。

- ・都市部の女の子は低い年齢で結婚する割合が低い。たとえば、サハラ以南のアフリカおよび南アジアでは、農村部に住む若い女性の 50% が 18 歳までに結婚するが、これは都市部

に住む若い女性の倍になる（注7）。

女の子の職業——エジプトの都市における職業訓練と雇用機会（注8）

エル・マルグは農村部からの移民が造った都市だ。30年前までは畑と村だけしかなかった。今ではカイロ郊外に広がるスラム街となり、50万人が暮らしている。

「ここでは若者が仕事を見つけるのは大変です」と語るのは、若者に3カ月間の職業訓練を行い、最後に彼らが仕事を見つけるための活動をしているフォルサ・プログラムの世話役の一人、サマーだ。「だからこそフォルサが大いに役立っているのです。フォルサとは、アラビア語で『機会』を意味します」

このプログラムは、3つの区分の若者を対象としている。学校を中退した若者、大学まで行ったが就職先が見つからない若者、そして自分のスキルに合わない仕事に就いている若者。ほとんどの若者が貧しい家庭の出身だ。募集はポスターや巡回興行でも行われるが、フェイスブックも活用されている。この研修はまずインドで実験的に行われ、その成功を受けてエジプトに導入された。

フォルサの研修は東カイロで既に実施されて成功を収め、修了生の90%が就職した。19歳のマルワも、このプログラムに参加した一人だ。「フォルサに参加する前は、人と接するのが怖かったです。でもフォルサに参加してからは、引っ込み思案と怖がりを克服して、誰とでも打ち解けるようになりました。ものすごく自信ができました。研修を通じてできたたくさんの友だちとは、怯えや心配もなく何でも話すことができます」

まだ学生のオラは言う。「私たちは若者です。私たちはこの国の未来ですが、現状を分析すると、若い女性には就職の機会が不足していると思います。政府は若い女性のことも考えて、私たちに男の子と同様の機会を与えるべきです」

危険にさらされる

都会の生活はたくさんの機会を提供してくれるが、特に女の子にとっては、リスクを伴うものだ。貧困と人口過密、不衛生な環境、暗い夜道、住居不足やセクシャルハラスメントはすべて、女の子が安全を感じるができない事柄だ。そして、こうした恐怖感は、貧困国やスラム地域の女の子だけが感じるものではない。

・オランダでは、本報告書のために実施された都市部の女の子に対するオンライン調査で、女の子と若い女性が自宅の近所を日中に歩いても危険は感じないが、11歳から18歳までの年齢層の40%が夜に歩くのは危ないと感じると答えた。この割合は、17歳から18歳の年齢層では63%に上がった。

・世界保健機構の調査によると、バングラデシュでは都市部に住む15歳以上の若い女性がパートナー以外の相手からの身体的または性的暴力を受けた割合は、農村部の2倍にのぼ

った（注 10）。

・ブラジルで実施された調査では、都市部に住む全女性回答者の 4 人に 1 人が暴力被害を報告したのに対し、農村部では 6 人に 1 人しか暴力被害の報告はなかった（注 11）。

・あなたが世界のどこかで拡大し続けるスラムに住む女の子であったら、人生はさらに危険なものだ。思春期の女の子は日常の用事をすませるときにでも危険にさらされる。国連人間居住計画のアンナ・ティバジュカ事務局長はこう指摘した。「スラムの女の子は夜中に不潔な公衆トイレまで行ってレイプされる危険を冒すか、ビニール袋で用を足すかという選択を迫られるのです」

プランはウィメン・イン・シティーズ・インターナショナルの支援を受け、**8つの行動計画**を策定した。

すべての女の子は以下に対して権利がある。

1. 都市部での安全な教育へのアクセス
2. 安全な都市環境
3. 安全できちんとした住居
4. 都市部での安全な移動
5. 都市部での手頃で利用可能なサービス
6. 健全な都市環境で、年齢にふさわしいまともな職業
7. 都市部の安全な空間
8. 都市部をもっと安全、包括的、利用可能な場所とするために参画する

誰も気にしてくれない——通りに出る思春期の女の子たち

「誰も気にしてくれないんです。社会の誰一人、私たちのことを尊重してくれないし、会いたいと思ってもくれない。私たちが生きていようが死んでいようが、誰も気にしないんです」

ケニアのストリートチルドレンの女の子（注 13）

UNICEF は、世界中に少なくとも 1 億人のストリートチルドレンがいると考えている（注 14）。そしてそのおよそ 30%が女の子だ。インドは世界最大規模のストリートチルドレンを抱えており、その数は 1800 万人と推定される（注 15）。多くの国で、この数は増加を続けているようだ。たとえばインドネシアのジャカルタでは 2004 年のストリートチルドレンの数は 98,113 人だったが、2006 年にはその数が 114,889 人に増えている（注 16）。

「黙っていたほうがいい」(注17)

「私の名前はサラです。わたしは14歳で、2年前にアクラに移ってきました。街に来るとすぐに、あるグループの仲間に入って、売春の仕事を紹介されました。私たちは一緒に仕事をして、協力して連絡を取り合ったり客を見つけたりしています。殆ど毎晩、客と一緒に過ごします。私のいる地域にはギャング団がいて、しょっちゅうケンカをしています。私たち女の子が、リーダーに嫌がらせをされることもあります。客の取り合いで別の女の子とケンカをしたこともあります。時々、客に殴られることもあります。必要なら警察に行けばいいのはわかっていますが、黙っていたほうがいい場合もあるということもわかっています。それに、警察も場合によってはギャングと変わらないくらい暴力的です。一度捕まったとき、警察官に銃の台尻で頭を殴られました。学校には一度も行けませんでした。そのせいで、周りのみんなより賢くないと感じています。洋裁を勉強して、ちゃんとした生活ができるようになったらいいのにとおもいます。通りで生活していると難しいですけど、それでも明るい未来を待ち望んでいます」

思春期の女の子が通りで暮らすようになるにはさまざまな理由がある。フィリピンで実施されたある調査によると、家庭での問題、特に暴力が、子どもたちが家を出た主な理由だった(注18)。

- ・親や年長の兄弟姉妹に身体的暴力を受けたため(21%)
- ・自分の家が好きになれないため(21%)
- ・親に棄てられた、あるいは親がどこにいるかわからないため(15%)
- ・親が離婚、あるいは義理の親のため(6%)
- ・金を稼がなければならないため(3%)
- ・家では基本的なニーズが満たされないため、あるいは家の状態が劣悪なため(2%)

いったん通りに出てしまうと、女の子は圧倒的な量の暴力というものを経験する。その内訳は通行人からの暴力、売春に携わる中での暴力、恋人や男性の「兄弟」からのレイプや暴力、売春斡旋者や麻薬の売人からの精神的・身体的非道行為、警察や警備員、刑務官からのセクシャルハラスメント、攻撃、暴力とさまざまだ(注19)。

「普通の住民や、近所の会社に勤める男の人たちがたくさん川へやってきます。そして、女の子たちに性行為を要求します。男の人たちはここへ来て、好きな相手を選ぶんです。私が選ばれば、子どもを他の女の子に預けて、客を川の方へ連れて行きます」
タニア、ジンバブエ(注20)

女の子への投資、未来への投資

「女の子たちが今のこの世界でもっとも創造的であり、もっとも変革的である一方、もっ

とも開発が遅れている資産だということは明らかです。この可能性を引き出すために、どれだけの努力が必要だというのですか？」

ヨルダン王妃ラーニア（注 21）

支援さえあれば、女の子は、そこにあるチャンスをつかむことができる。実際、女の子のニーズについて最良の情報源は、思春期の女の子自身だ。以下の宣言は 2010 年 3 月、世界初のストリートチルドレンのワールドカップで競い合うために 7 カ国から南アフリカのダーバンに集結したストリートチルドレンや元ストリートチルドレンの女の子たちの言葉である。その際に開催された会議で、彼女たちは自分たちに対して権限を持つ当局に、自分たちを受け入れ、尊敬し、保護することを求めるマニフェストを策定した。

「私たち、通りに暮らす、あるいは暮らしていた女の子たち、そしてイギリス、タンザニア、南アフリカ、フィリピン、ウクライナ、ブラジル、ニカラグアの 7 カ国のシェルターで暮らす女の子たちは、2010 年 3 月 20 日～22 日に南アフリカのダーバンで開催されたデロイト・ストリート・ワールドカップ会議で出会いました。

私たちストリートチルドレンの女の子たちには以下の権利があり、その尊重を求めます」

- ・シェルターや自分の家に住む権利
- ・家族を持つ権利
- ・安全でいる権利
- ・性的虐待から守られる権利
- ・学校に通い、無償で教育を受ける権利
- ・健康に過ごし、無料の医療サービスを受ける権利
- ・意見を聞いてもらえる権利
- ・所属する権利
- ・尊敬と良識をもって対応される権利
- ・男の子と同じように扱われる権利
- ・普通に成長する権利

思春期の女の子と通信技術——機会か搾取か？

「テクノロジーやマルチメディアといった仕事には興味があります。エンターテインメントや音楽も好きですし、いろんな人と知り合えます。（学校で）メディア、ウェブ、インターネットを知って、大好きになりました。そこでなら友だちとつながることができます」

ティブシソ・ムシビ、18 歳学生、スワジランド（注 22）

都市部に住む利点のひとつが、情報通信技術(ICT)を利用しやすく、学びやすいという点だろう。新たな情報技術やメディアに触れることで若い女性の人生に多大な影響を与え、真の可能性や機会が開ける新たなアイデアや考え方を導き出すことができる。しかし、都会の生活と同様、こうした新たな機会も、リスクなしというわけにはいかない。

多くの技術が安価で手に入りやすくなる中、若い男性と同様に思春期の女の子と若い女性も、そうした技術を使って恩恵を受けることができる。これは単にそうした技術を利用できるというだけではなく、それらを存分に利用できるだけのスキルと専門知識、そして安全に利用するための知識を身につけるということも含む。

こうした技術が思春期の女の子にとって重要な理由を、具体的に7点挙げる(注23)。

1. 仲間とのつながりを保つため。これにより、孤立化が問題となっている国では孤立を減らすことができる。
2. 学習を続け、新たな技術を身につけるため
3. コミュニティや国の中で積極的な役割を果たすため
4. 仕事を得るための技術を身につけるため
5. HIVとエイズなど、他では知りえないかもしれない事柄について具体的なスキルや知識を身につけるため
6. こうした技術の使い方を覚えることで、自尊心が芽生えるため
7. とにかく、身の安全を図るため

さらに、ICTは思春期の女の子と若い女性にとって経済的な価値もある。現代技術を身につけなければ、彼女たちは職場で不利益をこうむるのだ。

「現代社会では、コンピューターは仕事、学習、コミュニケーション、そして世界のことを知るために必要なツールです。雇用機会に関して言えば、最近の仕事の95%がなんらかの現代技術を必要とします」と、アメリカのチルドレンズ・パートナーシップのウェンディ・ラザルスは言う(注24)。

女の子を科学技術から遠ざけるものとは？

2010年の「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」のために実施された調査では、女の子が科学技術に近づくことを妨げる主な要因が6点特定された。

1. 差別——女の子はいまだに多くの社会で二等市民とみなされている。
2. 数——男の子の数は女の子よりも多く、コンピューターへのアクセスも優先される。
3. 自信——学校で平等に利用する機会がないため、女の子はIT関係の仕事に就くにあたって男の子よりも自信が持てない。同じ職に応募する若い男性と比べて、技術や知識が劣っていると感じてしまうためだ。

4. 言語——こうした科学技術を利用するには、通常、英語力が必要となる。母国語での初歩的な読解力しかない女の子にとって、これは大きな壁となる。
5. 時間——女の子は幼いうちから家事をこなしており、新たな科学技術を使ってみるための自由な時間が男の子よりも少ない。
6. 資金——女の子は兄弟たちに比べて、たとえば携帯電話とその維持費や、インターネットカフェでウェブにアクセスする費用などを支払えるような資金源を持っている場合が少ない。
7. 自由——親は娘が一人で街に行くことを心配するため、男の子のほうがインターネットカフェを利用する自由がある場合が多い。

サイバースペースの闇——科学技術がいかにか性的搾取を増長するか

「コンピューターとモデム、そして検索エンジンを持っている普通の人なら、暴力的で下劣な画像にももの数分で辿りつくことができます。つい15年前なら一生かかっても見つけられなかったような情報です」

ドナ・ヒューズ (注26)

ICTは女性に対する暴力や搾取、非道な行為の画像を、性的に発達しつつある重要な時期に、思春期の女の子の目の前にさらしている。世界中で性的搾取の影響を受けるのは男の子よりも女の子のほうが多いのは明らかな事実で、5人に1人の女性が、15歳までに性的虐待を受けたことがあると報告している(注27)。インターネットは無害に思える赤の他人との親密な空間を創り出すので、思春期の女の子はインターネットや携帯電話、その他の通信技術を経由した人身売買も含むさまざまな近代的搾取方法の格好の標的になってしまう。ある専門家は言う。「インターネットは、昔からある不品行を行うための新しい媒体に過ぎません」(注28)

若い女の子の下劣な写真を撮って、数秒で世界中に広めることが可能な時代になってしまったのだ。

イギリスで実施されたある調査によると、特に16歳から17歳の年齢層にあてはまる思春期世代が、「オンラインでの誘惑」の深刻な危機にさらされている(注29)。思春期の女の子も、オンラインの誘いや「グルーミング」(女の子の警戒心を解き、信頼を得て危険な状況に誘いこむ行為)の危険にさらされている。これにより、性犯罪者は女の子を性的チャットから実際に会うことまで、さまざまな形で標的にすることが可能になっている。最近、イギリスで発生したある事件では、若い女性がフェイスブックで知り合った男性にレイプされ、殺害された。こうしたオンラインでの誘惑が思春期の女の子にどのような身に迫る危険をもたらすかを如実に表す事件だ(注30)。

The International Institute for Child Rights and Development (子どもの権利と成長に関する国際研究所) は Child Protection Partnership (子どもを守るパートナーシップ) を通じて、「Because I am a Girl」のためにブラジルで調査を行った(注31)。この調査では44人の女の子に聞き取りを実施し、全国規模のオンライン調査には400以上の回答があった。

良いこと

- ・84%の女の子が携帯電話を持っている
- ・60%がオンラインでの危険について学んだと答えた
- ・82%がインターネットを使ったことがあり、27%が常にインターネットに接続していると答えた
- ・ICTの利用について女の子の意識と知識が高ければ高いほど、インターネットに接続していても安全である割合が高い

悪いこと

- ・79%の女の子が、インターネットに接続していて安全を感じないと答えた
- ・自分がオンラインでどこにアクセスしているかを親が知っているか答えたのは、調査に回答した女の子のほぼ半数だった
- ・オンラインで危険を感じたり、不安を感じたりした場合にどこに通報したらいいかを知っている女の子は3分の1に過ぎなかった
- ・50%近い女の子が、オンラインで知り合った人に直接会いに行ってもいいと答えた

「本当に頭にくる」——仲間内でのいじめ

女の子がオンラインで標的となり、攻撃を受けるのは、他人からだけではない。親友、同級生、恋人も、科学技術を攻撃手段に使う可能性があるのだ。携帯電話やインターネットを使った子ども同士のいじめも、急増しつつある問題だ。

インターネット上でのいじめは現実世界でおこるいじめの延長だが、いくつかの違いがある。

まず、子どもは現実世界でのいじめからは逃れることができるが、インターネット上のいじめは家までも追いかけてくる。被害者は携帯電話やコンピューターの電源を入れるたびにいじめに遭うのだ。

「(インターネットなら) 誰かについてひどいことを言うのは簡単です。そしてそれが学校にも持ちこまれます。友だちにこれをやられると、最悪です。本当に頭にきます。もう二度と学校になんか行きたくなくなります」(注32)

次に、いじめの結果がコメントや画像といった形でずっと残る。その多くがインターネットに掲載され、無数の受信者間で閲覧される下劣な、あるいは性的な画像だ。

女の子は自分の個人情報をインターネットに掲載したり、自分の写真をサイバースペースで公表、あるいは閲覧させることで知らず知らず危険なオンライン行為に及ぶ可能性がある。「セクスティング（英語で携帯メールのことを指す『テクスティング』とセックスを組み合わせた造語）」は携帯電話で裸の写真を送信する行為で、若い人々の間でときどき行われている。10代の若者たちは自分の恋人だけにその写真を送っているつもりかもしれないが、その画像がものの数秒で世界中に広められることを忘れている。

女の子の能力を解き放つ——思春期の女の子と ICT に関する提言

「10代の子どもたちがオンラインの安全について主張するのは大事なことだと思います。インターネットはものすごい技術だからです！ 便利で楽しいツールだし、子どもたちはみんな、いつでも使うようになってきています。10代の子どもとその親にオンラインの危険について教えて、どうやって対処すればいいかを教えることで、10代の子どもたちが安全に、責任を持ってインターネットを楽しむ手助けができます」

エイダ、14歳、アメリカ（注33）

ITシステムの急激な発展に、世界や各国の法律は追いつけていない。既存の条約や国の法令は強化され、さらに厳格に実行されなければならない。プランは、女の子のニーズが満たされ、彼女たちが得るべき機会がちゃんと得られるよう保障するために、政府やビジネス界、市民社会組織などで科学技術について決定権を持つ人々に対して6つの行動を提案する。

行動への呼びかけ——女の子と科学技術

1. ITハードウェアに関して、女の子のアクセスと主導権を増加させる
2. 女の子の数学、科学、職業教育に投資する
3. オンライン保護機能を拡大・改善する
4. 女の子に対するオンラインの暴力をやめさせる
5. 国際的な法令を実施し、連携を強化する
6. 女の子に、自分の身を守る方法を教える

女の子への投資

都市部でもデジタル世界でも、女の子と若い女性への本質的な投資と、彼女たちの参画を呼びかける真の意欲がなければ、彼女たちは経済的に不利益をこうむるだけでなく、個人

的にも危険にさらされることになる。女の子にとって本当にためになり、IT に強くなる研修プロジェクトは存在する。いくつもの団体が学校の内外で科学技術系のキャンプや IT 研修を実施しているのだ。他にも、携帯電話の技術を利用して識字能力を強化したり、健康などの問題に関する基本的な情報を伝達して女の子を危険から守ったりするプロジェクトもある（注 34）。女の子と若い女性は IT 技術がどれほど重要なのか、よくわかっている。エジプトでは、アーリヤが母親に「うちに必要なのは温かい食事よりもコンピューター」だと言った。彼女にとってはオープンよりも、コンピューターの方がずっと重要なのだ（注 35）。

実際、これからはますますそうになっていく。ICT 分野の発展の速度は、今後加速していくばかりだ。問題は、昔から存在する虐待がオンライン世界の力と影響力によって持続し、悪化していくのをただ見つめるだけではなく、デジタル世界が提供する機会を女の子が掴めるような技術を身につけられるように世界が協力していけるかどうかだ。

私たちは女の子だから

「‘Real Choices, Real Lives’ ～本当の選択、本当の人生～」(注 36)

——もうすぐ 4 歳

2007 年、プランは「‘Real Choices, Real Lives’ ～本当の選択、本当の人生～」と名付けた調査を開始し、女の子たちを生まれてから 9 回目の誕生日まで追跡していく。彼女たちの物語は、娘が成長するにつれて世界中の家族が迫られる判断や選択を浮き彫りにするものであり、白書に記載されている事例や数字が生身の人々—実在する女の子とその家族—を表していることを、まざまざと見せつけてくれる。

今年の白書は新しく変化を続ける場（都市部と急成長を続ける新たな科学技術の両方を含む）における思春期の女の子に焦点を当てているため、調査対象となっている女の子の親だけでなく、その兄や姉、いとこ、隣人たちにも聞き取りを実施した。プランの「‘Real Choices, Real Lives’ ～本当の選択、本当の人生～」調査に参加している女の子の大半が農村部に住んでいるにもかかわらず、今年の「Because I am a Girl 世界ガールズ白書 2010」で報告された劇的な変化は彼女たちの家族にも影響を与えていることが判明した。これは中南米（ブラジル、ドミニカ共和国、エルサルバドル）と西アフリカ（ベナン、トーゴ）で顕著だった。ベナンでは、調査に参加している家族の 3 分の 1 が、季節的あるいは長期的に近隣の都市や首都へ移り住んでいた。家族の一員が都市部に移り住むと、農村部の貧困という「押し」の要素と都市生活が提供する機会という「引き」の要素の両方が顕在化する。調査に参加しているトーゴ人の 20 家族の実態からは、地方のコミュニティに暮らす人々が貧困から抜け出すために都会に出て行きたいという「引き」の要素が読み取れる。そのうち、12 家族では、すでに家族（母親、姉、兄）が都会に移り住んでいた。

他の多くの人々も、仕事を見つかったり子どもにもっといい教育を受けさせたりするために

近くの都市に移り住むことを考えている。たとえば、マッサマの父親は、娘に教員になってもらいたがっている。だが村には中学校がないので、最寄りの都市に引っ越すことを考えている。多くの家族にとって、最寄りの都市はセコデという街だ。トーゴを南北に縦断する幹線道路沿いに位置するこの街は、西アフリカ最大規模の子どもの人身売買のルートになっている。教育上の利点があるとしても、バランスをとって考慮すべき危険をはらんでいるのだ。

ウガンダで聞き取りを実施した年長の対象グループに属する10代、隣人や家族ぐるみの友人などは、都市部に移り住む意欲をはっきりと示し、その理由として以下のようなものを挙げた。

- ・実家に送金して年老いた親を支えるため
- ・村よりも胸踊る楽しい暮らしをするため
- ・実家の出費を減らすため
- ・故郷に家を建てる資金を貯めるため
- ・兄弟姉妹の学費を支払うため
- ・最終的には、家族の誰かが都市部で就職できるよう手助けをするため

ブラジルでは、聞き取りを実施した家族の少なくとも半数に、進学のため、あるいは就職のために既に実家を離れた年長の娘がいた。調査対象となっている女の子の姉はこう説明した。「高校を卒業して就職したいです。そしてできれば大学にも行きたいけど、ここコドの村にはどちらもありません」

ブラジルで話を聞いた若い女性は弟や妹たち、そして親が仕事を探しに遠くへ行ってしまった子どもたちを代表するようにこう話した。「家族の誰かが家を離れると、その後には良くない方向への変化が待っています」、そして「家族の誰かがいなくなると、とてもさみしいです」

調査では、女の子と新たな科学技術についての驚くべき情報も明らかになった。調査対象となっている女の子の親戚にあたる10代の子どもたちの一部は情報技術を利用できる状況にある。中でも存在感を放つのが、携帯電話の存在だ。利用状況はさまざまで、たとえばトーゴでは、調査対象の家族の誰一人としてインターネットについて聞いたことがなく、携帯電話を日常的に使える状況にもなかった。だが調査対象の多くが都市部のスラムに暮らしているブラジルでは、10代の女の子も男の子も全員がインターネットを学校かインターネットカフェで利用できる状況にあった。ただし、聞き取り対象の男の子たちの大半は、携帯電話も日常的に使える状況にあるようだった。

ブラジルの母親と娘の対象グループと話をしている明らかになったのは、安全を考える親心のために行動を制限されているということだった。女の子たちはこう言う。「専門課程を取りたかったのですが……コミュニティの外で開催される授業はお母さんが取らせてくれ

ないのです。セクシャルハラスメントを心配しているのです」。娘を守りたいという気持ちが女の子を学校から、インターネットから、大学から、そして潜在能力を発揮する機会から遠ざけているのだ。

前進を続ける

今回の白書では、世界中のさまざまな環境に暮らし、多様な困難に直面する思春期の女の子の声を聞くことができた。二人として同じ女の子はいないが、どこにいてどのように暮らしていようとも、彼女たちには同じ権利があり、その権利を行使できるようにしてほしいと、我々に呼びかけている。我々は都市部と ICT に関して思春期の女の子が直面する問題に取り組んできた。これらは女の子が教育と健康を改善する真の機会と 21 世紀が差し出すチャンスをつかみ取る手段を提供できる、そして提供すべき、重要な新領域だからだ。女の子は世界の未来の半分を担っている。今後の数十年間で、私たちの暮らす街を動かし、科学技術を形作っていく市民なのだ。子ども時代から成人女性への成長を手助けし、全員にとってより良い、より安全な世界を造っていくための技術と知識を身につけさせるのは、我々の責任だ。

70 年を超える国際支援の経験をもとに、プランは女の子と女性に対する差別が子どもの貧困の大きな根源的要因であることを認識している。女の子と男の子は同じ人権を有しているが、権利の行使にあたってはそれぞれ異なる困難に直面する。女の子は学校をやめさせられる可能性が高く、医療サービスも受けにくく、食事も少なく与えられる場合が多い。また、女の子であるというだけで暴力やセクシャルハラスメントの被害にも遭う。このような機会と保護の欠如は不公平であり、不当である。にもかかわらず、女の子と若い女性への投資は、女の子自身だけではなくその家族、コミュニティ、国全体の貧困を軽減する上で過度に有益な効果を生む。この議論は正義と機会均等の問題とも調和するものであり、プランが「Because I am a Girl」キャンペーンを今後数年間の最優先プロジェクトとしている理由のひとつでもある。

今回は、一連の「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」のうち、第 4 弾になる。どの白書においても私たちは差別と軽視に直面し、しかし同時に回復力と決意も目の当たりにしてきた。どこに目を向けても、そこには不当な扱いを受ける女の子と、人生が投げかけてくるすべての困難に耐えている女の子がいる。中には生き延びられなかったり成功できなかったりする女の子もいるが、多くは逆境を跳ね返して成功している。私たちは彼女たちの経験から、彼女たちが話してくれた物語から、女の子たちの人生に共通する道筋から、そしてこの一連の白書から学ぶことができるのだ。

ここでは、白書が焦点を当てた 2 つの領域において女の子の機会を改善するための具体的な提言を記しているが、より一般的に誰もが貢献することもできる。我々は思春期の女の子の意見に耳を傾け、その声が意思決定者に届くようにしなければならない。彼女たちの

意見から、我々は学ばなければならない。彼女たちを調査、計画立案、政策に含めなければならない。女の子の技術に投資し、彼女たちが情報を利用できるよう保障し、情報を活用して自分の身を守る力を得られるようにしなければならない。そして最後に、私たちは多くの女の子が逆境の中で達成してきたことが本当にすばらしいものだとことを示してきた。こうした成功を祝福し、すべての女の子が、世界のどこに住んでいても、人生の中で兄弟たちと同じチャンスを得られるようにしていかなければならないのだ。

「世界の指導者については、若者が単純に『明日の指導者たち』ではないということを知っておいてもらいたいと思います。私たちは今既に指導者であり、社会の一員なのです。私たちの意見は重要です。私たちはその意見を表明する場所が必要で、そのためには表現の自由が保障され、情報への確実なアクセスが保障される必要があります。私たちが開発問題でちゃんとしたパートナーとして扱われて初めて、本当の変化が起こるのです」
ハムザ、学生、タンザニア、ダルエスサラーム

(脚注)

- 1 プラン・インターナショナル、南アフリカ・ダーバン開催のストリートチルドレンのワールドカップで行われたプレシヤスへの聞き取り、2010年3月。
- 2 ASTRA 人身売買禁止活動「Human (Child) Trafficking, A look through the internet window (人身 [子ども] 売買——インターネットのウインドウから)」、ベオグラード、2006年、<http://www.astra.org.rs/eng/wp-content/uploads/2009/09/internet-research-eng.pdf>、72-73 ページ。
- 3 国連人間居住計画、「世界都市報告 2008/2009」、国連、<http://www.unhabitat.org/content.asp?catid=7&cid=5964&subMenuId=0&typeid=46> (アクセス日 2010年6月2日)
- 4 プラン・インターナショナル、「Because I am a Girl 世界ガールズ白書 2010」
- 5 UNFPA、「Growing Up Urban, State of World Population 2007: Youth Supplement (都会で育つ——世界人口報告 2007——若者の補完)」<http://www.unfpa.org/swp/2007/youth/english/story/preface.html> (アクセス日 2010年6月9日)
- 6 Rahman, M.、「Determinants Of Knowledge And Awareness About AIDS: Urban-Rural Differentials In Bangladesh (エイズに関する知識と意識の決定要因——バングラデシュの都市部と地方における差)」、『Journal of Public Health and Epidemiology (公衆衛生と疫学)』第1巻(1)2009年10月、14-21。
- 7 UNFPA、「Growing Up Urban, State of World Population 2007: Youth Supplement (都会で育つ——世界人口報告 2007——若者の補完)」<http://www.unfpa.org/swp/2007/youth/english/story/preface.html> (アクセス日 2010年6月9日)
- 8 Nikki van der Gaag への聞き取り、プラン・インターナショナル「女の子に関する報告書」2010年。
- 9 プラン・オランダ、「Safety in Cities: an online survey (都市部での安全——オンライン調査)」、プラン・インターナショナル「Because I am a Girl 世界ガールズ白書 2010」向けに実施。

- 10 Garcia-Moreno, Claudia 他、「Multi-country Study on Women's Health and Domestic Violence Against Women Initial Results on Prevalence, Health Outcomes and Women's Responses (女性の健康と女性に対する家庭内暴力に関する多国的調査——その蔓延、健康への影響と女性の反応に関する初期結果)」、スイス、世界保健機構、2005年。
- 11 同
- 12 『Urban World (都市世界)』、「A New Strategy to Close the Gender Divide (ジェンダー格差をなくすための新たな戦略)」、2009年7月、19ページ。
- 13 女の子の参加者、CRADLE / USK / CSCによるストリートチルドレンと少年司法制度に関する全国ワークショップ、ケニア、ナイロビ、2003年3月6～7日。
- 14 「Amount of Street Children Rises (増えるストリートチルドレン)」、『Tempo Interactive (テンポ・インタラクティブ)』、2007年2月5日。
http://www.streetchildren.org.uk/_uploads/Publications/5_amount_of_street_children_rises.pdf.
- 15 同
- 16 同
- 17 プラン・インターナショナル、「Because I am a Girl 世界ガールズ白書2010」向けにストリート・チャイルド・アフリカが実施した聞き取り。
- 18 Puzon, Marco Paa、「Painted Gray Faces, Behind Bars and in the Streets: Street Children and Juvenile Justice System in the Philippines (灰色に塗られた顔、鉄格子の奥と通りで——フィリピンのストリートチルドレンと少年司法制度)」、フィリピン大学とストリートチルドレンのためのコンソーシアム、2003年。
- 19 「Justice for Girls. Submission to the United Nations Committee on Economic, Social and Cultural Rights at its' 5th periodic review of Canada (女の子のための正義——経済的、社会的、文化的権利に関する国連委員会への提出、カナダでの第5回定期審査において)」、
<http://www2.ohchr.org/english/bodies/cescr/docs/info-ngos/justice-girls-new.pdf>、(アクセス日 2010年6月24日)
- 20 プラン・インターナショナル、「Because I am a Girl 世界ガールズ白書2010」向けにストリート・チャイルド・アフリカが実施した聞き取り。
- 21 ラーニア・アル＝アブドゥッラー王妃、「Women in the World (世界の女性たち)」、
<http://www.thedailybeast.com/video/item/women-in-the-world-queen-rania> (アクセス日 2010年6月24日)
- 22 バーキャンブスワジランド、2009年6月、アフリカのスワジランドでティブシソ・ムシビに行った聞き取り、ユース・アセツ、http://www.youtube.com/watch?v=E5h_0jhiPFs (アクセス日 2010年6月15日)
- 23 プラン・インターナショナル、「Because I am a Girl 世界ガールズ白書2010」
- 24 Youth of the Bresee Foundation (ブレジーの若者基金) とチルドレンズ・パートナーシップ、「Why Does Technology Matter For Youth? Community Technology Programs Deliver Opportunities to Youth (若者

にとってなぜ科学技術が重要なのか？ コミュニティーにおける科学技術プログラムが若者に機会を与える)、チルドレンズ・パートナーシップ、2007年、<http://www.childrenspartnership.org/AM/Template.cfm?Section=Home&TEMPLATE=/CM/HTMLDisplay.cfm&CONTENTID=11243> (アクセス日 2010年6月15日)。

25 プラン・インターナショナル、「Because I am a Girl 世界ガールズ白書 2010」

26 Hughes, Donna、「The Use of New Communications and Information Technologies for Sexual Exploitation of Women and Children (女性と子どもの性的搾取を目的とした新たな通信情報技術の利用)」、『Hastings Women's Law Journal (ヘイスティングス女性法律誌)』、第13巻1号、129-148。

27 Garcia-Moreno, Claudia 他、「Multi-country Study on Women's Health and Domestic Violence Against Women Initial Results on Prevalence, Health Outcomes and Women's Responses (女性の健康と女性に対する家庭内暴力に関する多国的調査——その蔓延、健康への影響と女性の反応に関する初期結果)」、スイス、世界保健機構、2005年。

28 Palfrey, John, Urs Gasser、『Born Digital: Understanding the First Generation of Digital Natives (デジタル世代に生まれて——デジタルネイティブ第一世代を理解する)』、ベーシック・ブックス、2009年。

29 「Chat-wise, street-wise (チャットに賢く、街に賢く)」、イギリスで開催されたインターネットフォーラム、2001年3月。

30 <http://www.guardian.co.uk/uk/2010/mar/08/peter-chapman-facebook-ashleigh-hall>

31 チャイルド・プロテクション・パートナーシップとプラン・インターナショナル、「Because I am a Girl 世界ガールズ白書 2010」向けに独自に実施された調査 (2010年3月)。

32 「Summary for Children and Young People (子どもと若者のための概要)」、『Byron Review (バイロン・レビュー)』、2008年、イギリス。
<http://www.dcsf.gov.uk/byronreview/pdfs/A%20Summary%20for%20Children%20and%20Young%20People%20FINAL.pdf>

33 「Girl Scouts, Let Me Know (ガールスカウトたち、教えてちょうだい)」、<http://lmc.girlscouts.org/Meet-The-Girls/Rockstars/Ada.aspx> (アクセス日 2010年6月24日)

34 プラン・インターナショナル、「Because I am a Girl 世界ガールズ白書 2010」

35 Nikki van der Gaag への聞き取り、プラン・インターナショナル「Because I am a Girl 世界ガールズ白書 2010」。

36 「'Real Choices, Real Lives' ~本当の選択、本当の人生~」調査 2010年は UKAID の資金援助 (PPA 助成金) を受けている。

世界の女の子に、生きていく力を。

